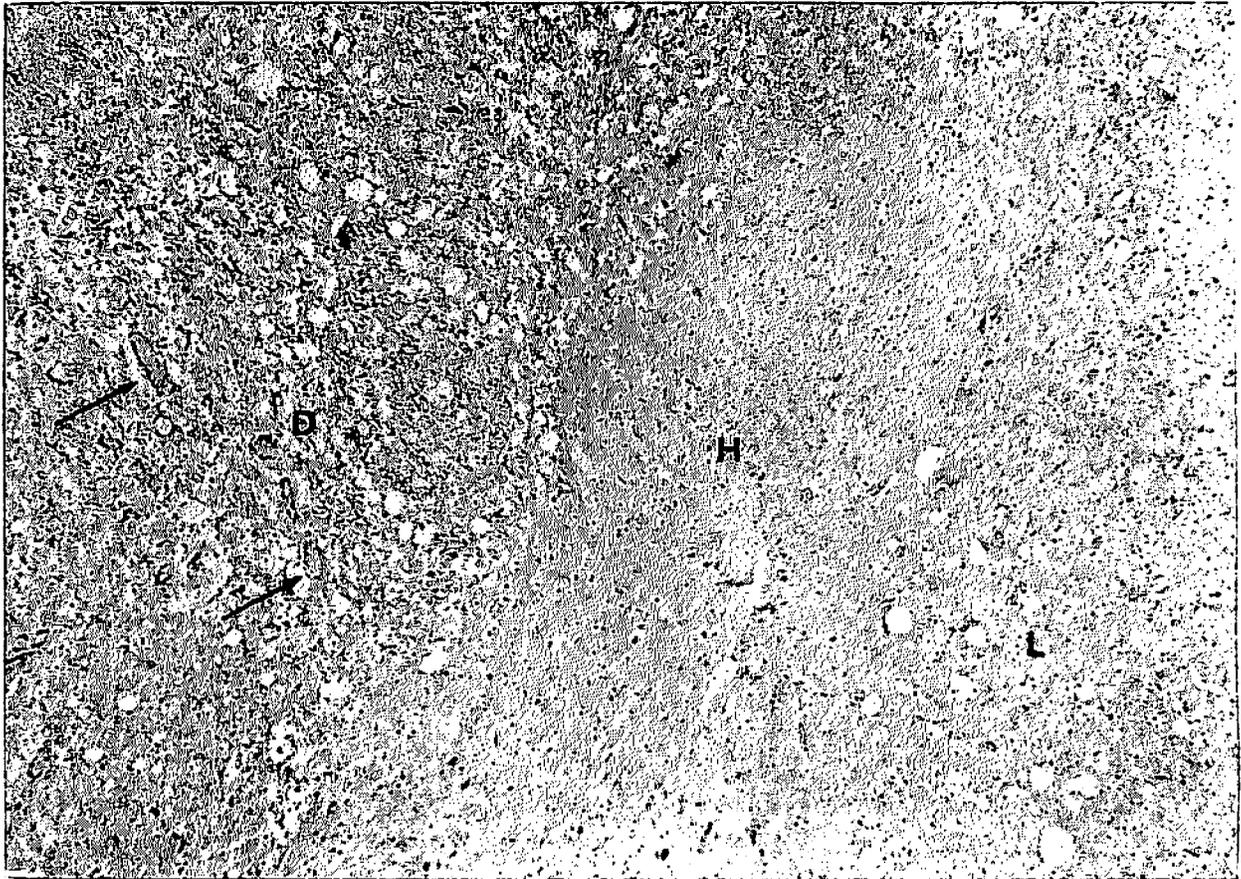


猫の脊髓

岩手大学農学部家畜病理・家畜内科学教室出題 第17回獣医病理学研修会標本No.255



10ヵ月令の雄ネコで、生後2～3ヵ月から歩様が不自然で、次第に悪化してきた。初診時、体温、脈搏、呼吸数に異常なく、血液検査の結果もGPTが71.0 RF unitと高値を示したほか、特記所見は見当たらなかった。体格は中等やや削瘦、痴鈍となり、知覚減退をみる。動作不活潑で、運歩不整、とくに後軀踰越として、しばしば横転する。運動反射なく、1 m位の高所から突き落とすとそのまま落下し、四肢での着地能が欠除していた。全身の組織学的観察の結果、脊髄を除き著変が認められなかった。

提出標本の頸髄(C2-3)および胸髄(T2-3)では、白質における空胞ないし空隙形成がまず目につく(写真, C2-3, HE染色, ×70)。頸髄ではC3-4に最も強い変化がみられたが、全般に髄鞘染色で淡染する脱髄巣が背索にみられ(写真D)、白質全般(写真L)とくに脊髄周縁部に強く軸索の腫大、膨化、消失が見られ、また髄鞘腔の拡大ならびに髄鞘の崩壊が認められた。この附近ではしば

しば血栓形成(矢印)と血管壁の器質化を認め、反応性グリア細胞も少数ながら認めることが出来た。灰白質(写真H:後角)においては軽度の乏血性変化を示す神経細胞も少数認められた。

胸髄白質においては、むしろ腹・側索における神経線維のいわゆるWaller変性が前景に立っている。すなわちC3-4背索を中心とする脱髄軟化病巣と、頸髄から胸髄に及ぶWaller変性が認められ、子馬の“Wobble”病に類似性を求めることが出来るように思われた。脊髄白質の変性は、ある種の中毒性疾患やウイルス性疾患などにも認められるが、本例ではその生前の記録などから、とくに検索を逸したが、頸椎発育の過程における頸椎管腔の異常狭窄などが疑われ、その結果、局所の循環障害を招来し、白質の軟化とこれにつづく変性をもたらしたものと考えられた。

病理組織学的には、頸髄および胸髄の白質変性と診断された。